

甲賀流戦国歴史講演
第4回
「甲賀流 戦国の城を楽しむ」



主催：水口ロータリークラブ

甲 賀 の 城 の 魅 力

滋賀県立大学 中 井 均

◆はじめに

- ・空前のお城ブーム ⇒ 2019年10月に岐阜県可児市で開催された全国山城サミット【2日間で20,000人以上の人たちが来場！】
※12月の横浜では3年連続でお城EXPOが開催され、3日間でやはり20,000人以上が来場
- ・お城ブームの主体者 ⇒ シニア世代だけではなく、若い人たちや子どもまで幅広い年齢層【そして最も注目できるのは若い女性層にも人気】
- ・注目されるお城 ⇒ 天守閣のある城だけではなく、石垣しか残っていない城跡にも関心が集まる【さらに最も注目できるのは中世の山城跡にも訪れる人たちが増加】
- ・明らかになった甲賀の城館遺跡 ⇒ 滋賀県教育委員会による悉皆調査(1981～90)【滋賀県内に約1,300ヶ所もの城館遺跡の存在することが明らかとなる】
甲賀の城館遺跡の立地、規模、構造がはじめて明らかとなる
甲賀市史による悉皆調査(2010年)【旧甲賀郡に約248ヶ所もの城館遺跡の存在することが明らかとなる】
甲賀の城館遺跡の個々の個性が明らかとなる

◆同名中と甲賀郡中惣

- ・「甲賀武士」、「甲賀古士」⇒ 鎌倉幕府の御家人や在地の土豪たち
長享元年(1487)の鈎の陣(将軍足利義尚本陣)への夜襲 ⇒ 甲賀53家、甲賀21家と呼ばれる
- ・畿内農村の自立 ⇒ 村落運営や水利管理、祭祀を自治組織が運営【惣村】
- ・甲賀郡では土豪による運営 ⇒ 領域の検断権や所職を保有【同名中惣】
大原同名中、望月同名中など
惣の意思決定 ⇒ 惣領家ではなく、同名中から選ばれた奉行たちの合議制
一郡規模での寄合へ【甲賀郡中惣】

◆甲賀の城館遺跡

- ・甲賀郡の城館遺跡の分布 ⇒ 近江の城館の約1/4が集中【同名中(後には甲賀郡中惣)組織を具現化する分布状況】
甲賀の城館分布数と構造は近江の城郭史上で最大の特徴
- ・一辺約3～50mの単郭方形が基本 ⇒ 例外的に群郭タイプが存在【植城、北

脇城】

- ・高い山に構えるのではなく、村落背後の丘陵先端に構える
- ・土塁と空堀という土木施設【普請】
- ・同名中掟書に見える甲賀の城 ⇒
 - 「一 他所与同名之衆弓矢喧嘩之時、於鐘鳴者、惣庄之百姓等、至堂僧迄、悉得道具ヲ持、可罷出者也、」
 - 「一 同名中惣劇ニ付テ、他所与弓矢出来之時ハ、手はしの城エ番等入事在之者、各到談合、人数ヲサシ入可申候、其時相互ニ如在申間敷候事、」(『大原同名中総与掟条々』)
- ※「一 吾郎哈(オランカイ)百姓は已下の体、守護たる者これなく、むかしの伊賀・甲賀のごとくにて、一在所一在所要害を構えこれあるについて、四、五ヵ所成敗せしめ候、ここにより、残る所何れも明け退き申し候間、放火仕り、まず討ち入り申し候事」(天正 20 年九月二〇日付、木下吉隆宛て加藤清正書状)

◆甲賀郡の城館遺跡調査、研究の最前線

①「手はしの城」を考える

- ・竜法師城の発掘調査 ⇒ 背面には巨大な堀切と土塁、野洲川方面には開放的な曲輪を設けるが、建物は皆無。土塁頂部に土師器皿を埋納した土坑【一味神水と共食共飲行為：手はしの城か】

②信楽の城を考える

- ・信楽の城館 ⇒ 朝宮城【畝状空堀群の存在】むしろ普遍的な戦国山城の構造一揆体制(甲賀郡中惣)の枠組みからはずれたもの【山城国との強い関係】
- ・宇治田原の山口氏 ⇒ 大和の松永久秀に与する【南山城から京へ抜ける足掛かりとして信楽へ進出か】

③貴生川遺跡の発掘調査

- ・貴生川遺跡 ⇒ 平地で検出された城館遺跡【1 辺約 50m の方形単郭構造】堀の幅約 6m、深さ約 2.6~2.8m、土塁基底部幅約 5~8m(堀底からの高さは 5m を超える) ⇒ 曲輪内部は約 25m×29m【堀を含めた全体の平面積の 1/3 程度にすぎない】
- ・曲輪のサイズ(居住空間)に比して土塁、堀の規模が大きい ⇒ 甲賀の村落背後に構えられた城館と同様
- ・周辺に城館遺跡が存在しない ⇒ 単独の同名中の有力家が築いたのではなく、複数の同名中、もしくは甲賀郡中惣の要請によって築城・運営された城か【杉川の河川管理(人の往来・物資の輸送等)】
- ・存続年代 ⇒ 出土遺物より 16 世紀後半に機能しており、17 世紀前半には埋

められてしまう【甲賀の城館成立年代を比定する重要な調査成果】

④石垣の城

- ・三雲城に残る石垣 ⇒ 甲賀郡で認められる石垣造りの唯一の城郭
織田信長の安土築城(天正4年:1576)以前の石垣 ⇒ 近江はその先進地域【湖北の浅井氏の技術と湖南の六角氏の技術】
- ・六角氏の石垣構築 ⇒ 居城の観音寺城は日本最古の石垣【矢穴技法による石材の調達】
※『下倉米銭下用帳』(金剛輪寺所蔵)弘治2年(1556)の記事 ⇒ 「御屋形様石垣打事」【寺院の技術による守護の城郭への石垣導入】
- ・近江南部における石垣造りの城郭 ⇒ 観音寺城、佐生城、星ヶ崎城、小堤城山城、三雲城【このうち矢穴技法が認められないのは星ヶ崎城のみ】
矢穴技法が六角氏の技術 ⇒ その分布に注目【佐生城〔北方防御としての出城〕←観音寺城〔居城〕→小堤城山城〔甲賀への逃亡ルート〕→三雲城〔甲賀での六角氏の仮居城〕】
- ・巨大な枡形虎口周辺に大形石材を用いた石垣 ⇒ 極めて儀礼的な空間【縄張りとのアンバランスな関係】

◆おわりに

- ・甲賀郡中惣の城館は典型的な小規模城館か? ⇒ 高さ 8m に及ぶ土塁や周囲に巡る空堀は小規模な城館跡とは言い難い
 - ・1村1城の再検討 ⇒ 人家のないところにも城館跡が分布
甲賀の各谷筋に構えられた城郭群が実は1つの城ではなかったか ⇒ 1つの城が1つの曲輪【いくつかが集まって1城を構成:和田、隠岐、高嶺、馬杉】
 - ・方形単郭を最後まで脱却できなかった ⇒ 室町幕府の奉公衆でもあった甲賀の武士たちがなぜ戦国期後半の発達した城郭構造を取り入れなかったのか【甲賀の城館遺跡最大の謎】
平和の象徴か ⇒ 伊賀では最後に織田信長との戦いで方形構造から戦国時代の普遍的構造に変換
 - ・藪漕ぎの向こうにあるもの ⇒ 戦国人たちが生死を賭けた縄張りが見えてくる【知恵と工夫】
 - ・山城歩きの楽しみ ⇒ 山中に残る城郭遺構をどう読み込むか【解き明かせたときの面白さ】
- ★ぜひ、現地足に足を運んで甲賀の城館遺跡を体感してください ⇒ その残りのよさと規模にきっと魅入られるはずです【甲賀では248通りの戦国史が楽しめる】
- だから山城歩きはやめられない!【藪漕ぎ上等!】**

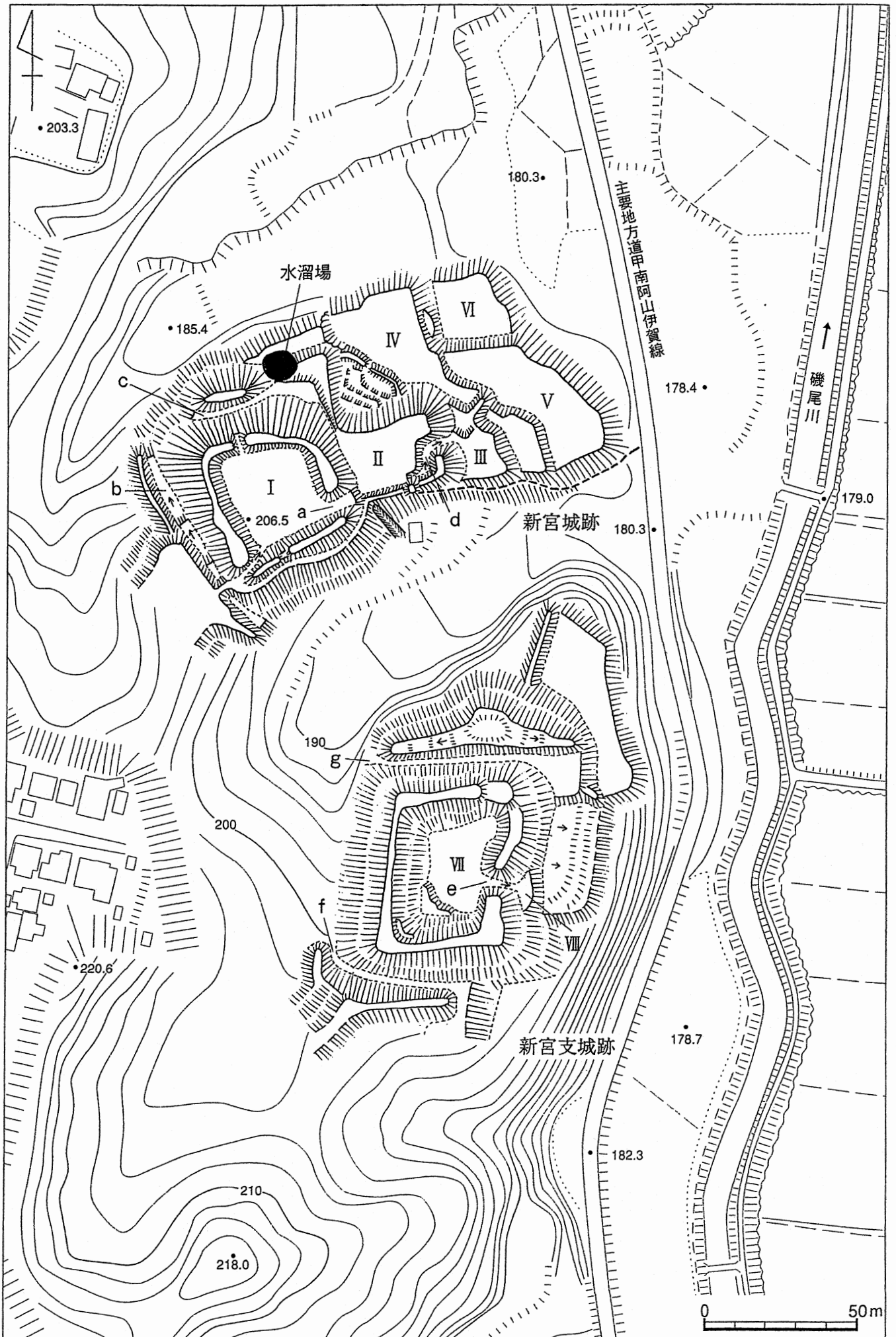


图1 新宮城跡・新宮支城跡概要図

(中井 均作図)

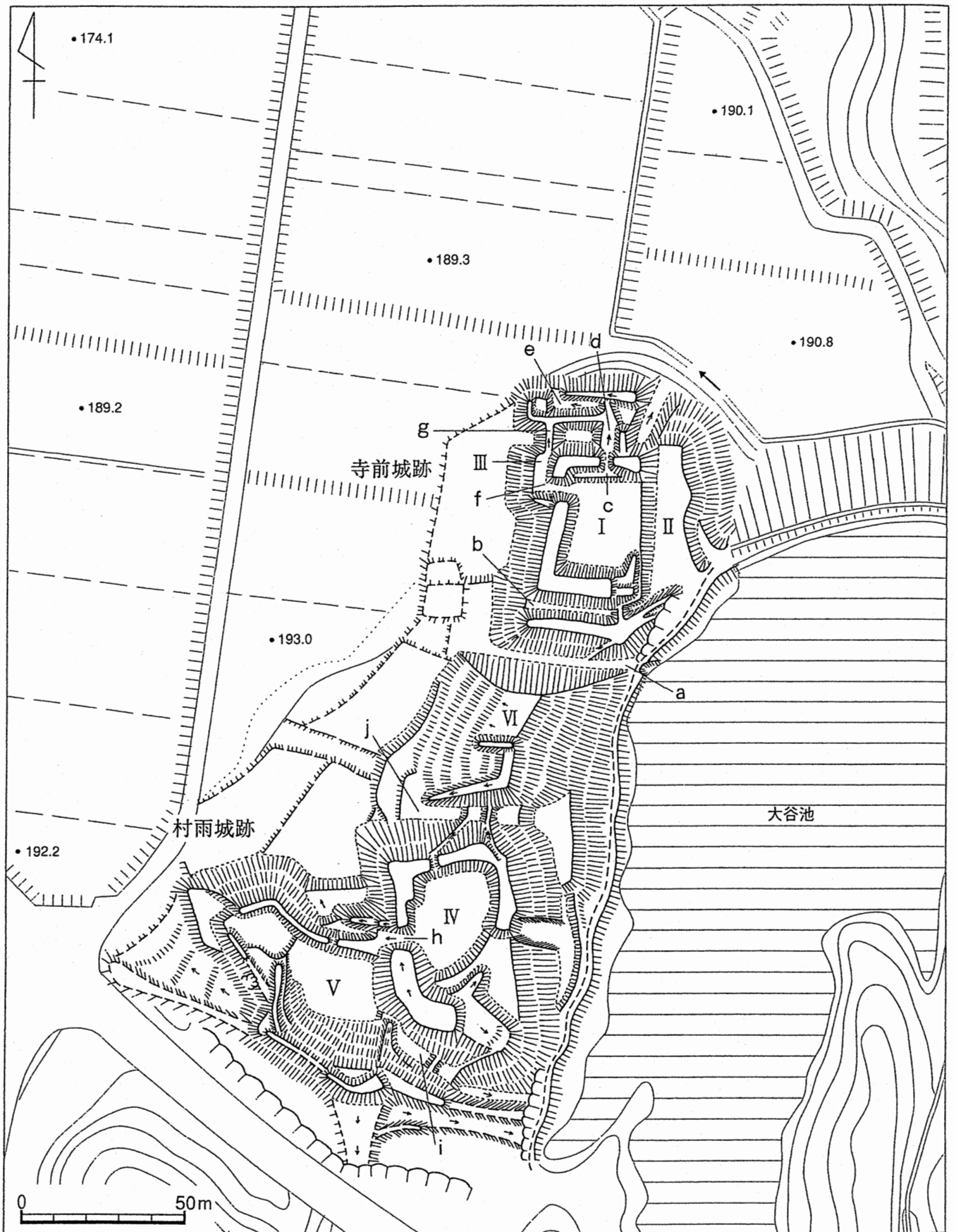


图2 寺前城跡・村雨城跡概要図

(中井 均作図)

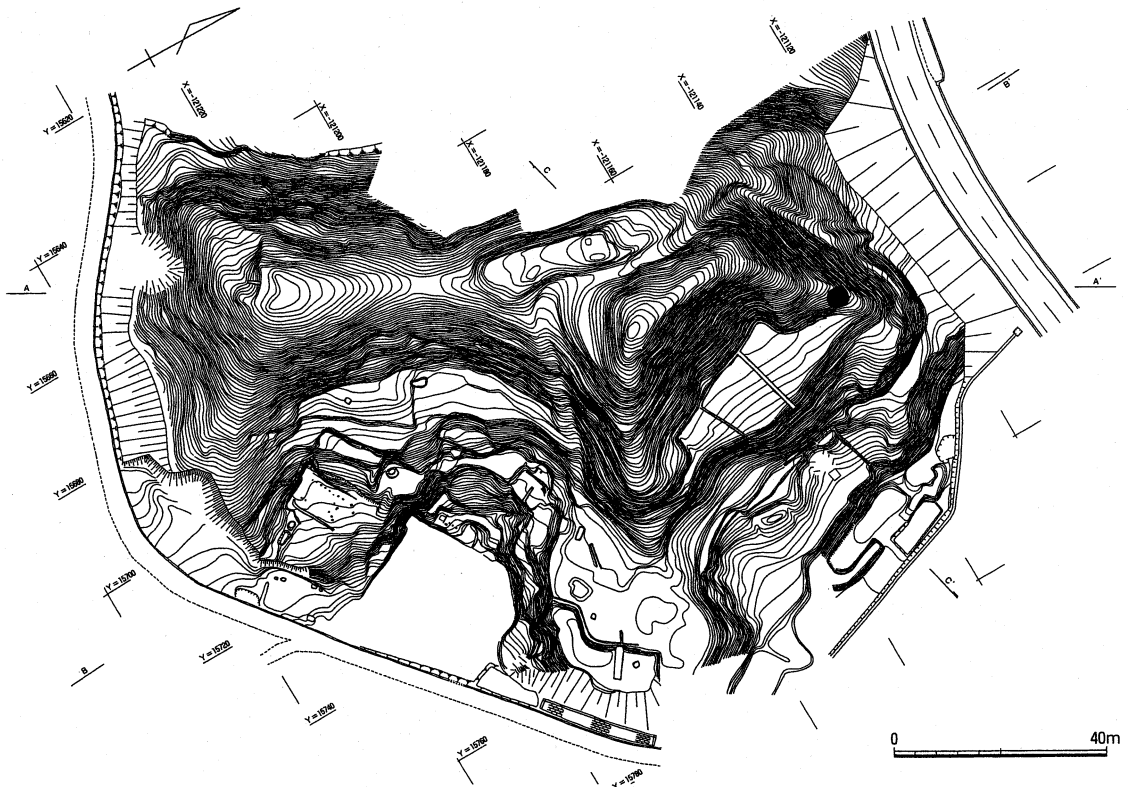


図3 竜法師城跡測量図

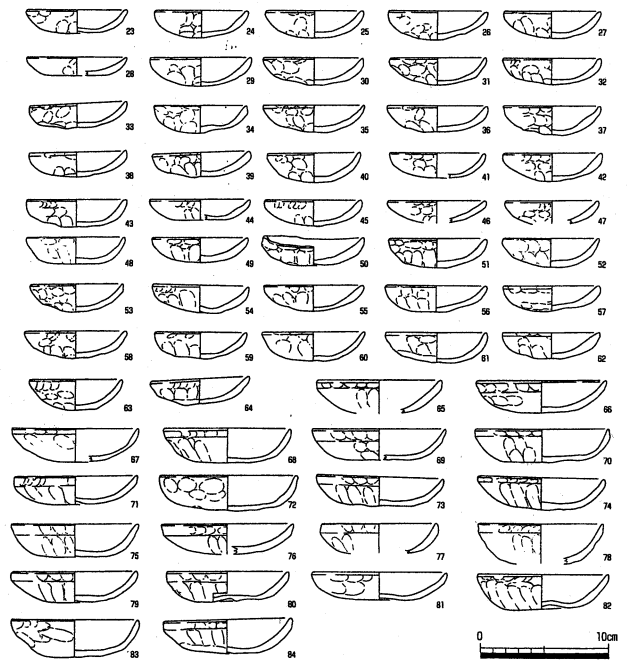
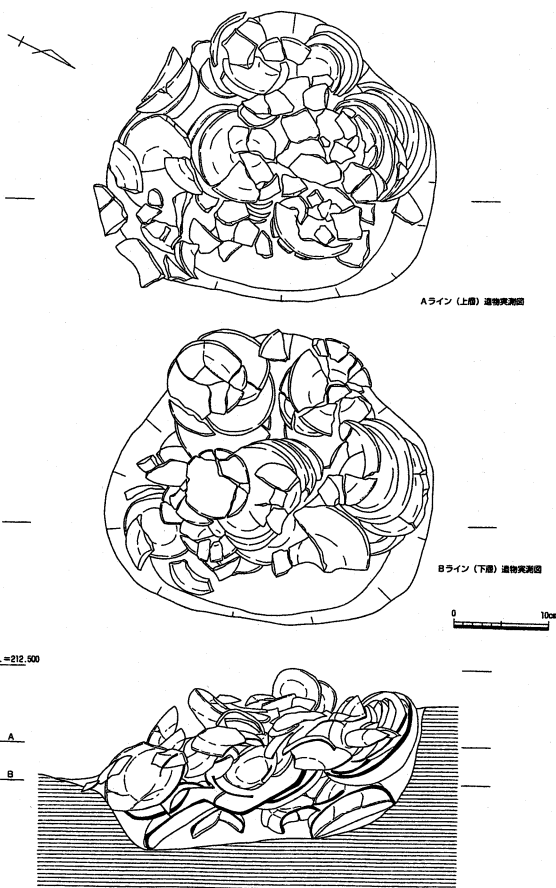


図4 竜法師城跡土坑C遺物出土状況(左)・出土土師器皿実測図(右)

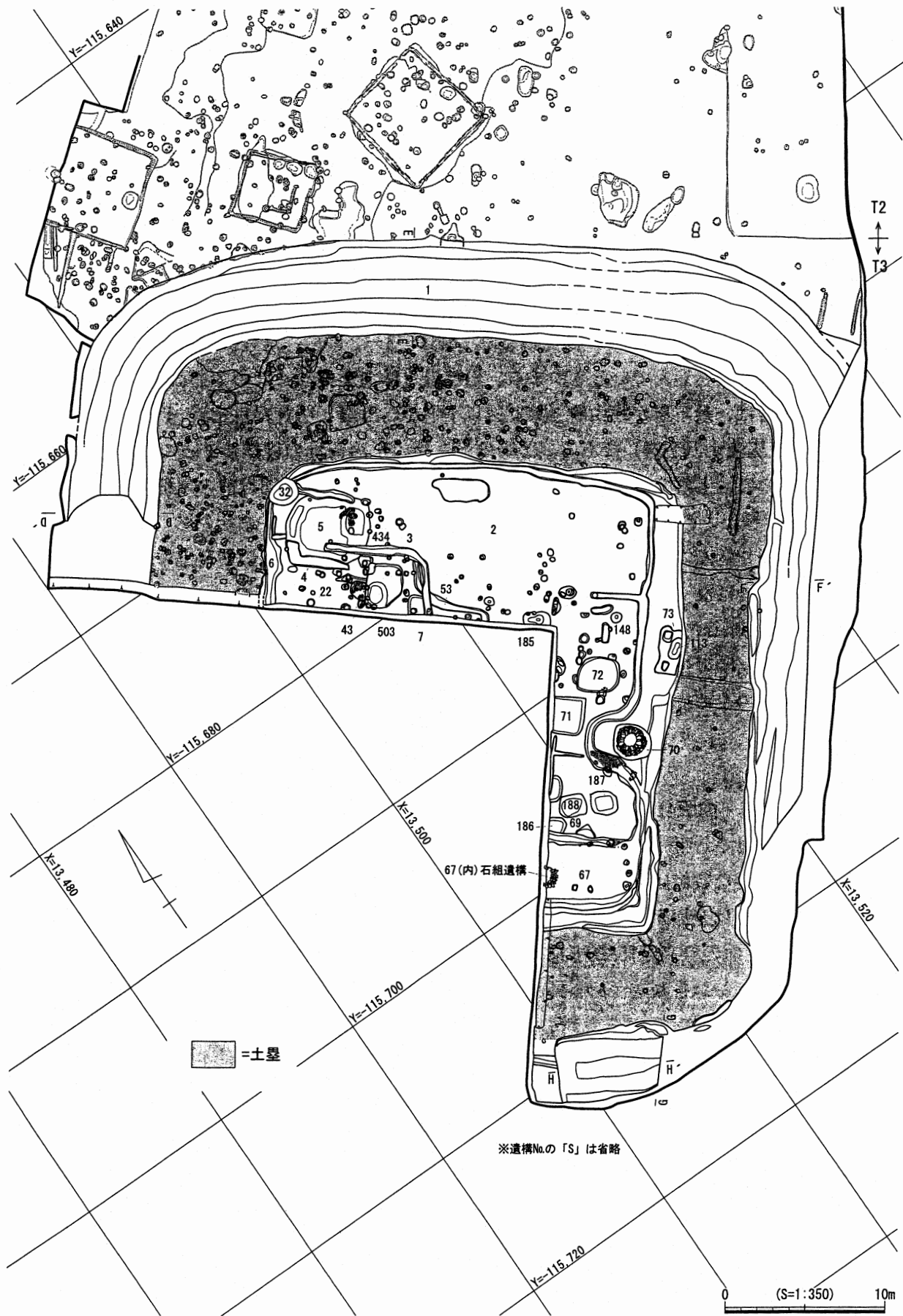


図5 貴生川遺跡平面図

甲賀流戦国歴史講演 甲賀流・戦国の城を楽しむ

「戦国の城の魅力」

日時：2020年2月8日（土）14:20～15:00

会場：碧水ホール

萩原さちこ（城郭ライター・編集者、公益財団法人日本城郭協会理事）

○ 戦国の城を歩く

「なぜ、“何も無い”山城が人々を魅了するのか？」

… 建造物がない＝何も無い、ではない。

都市化された近世の城より城の骨組みは残存し、“戦国のリアル”は戦国時代の山城にこそ残っている。

① 研ぎ澄まされた先人の知恵に触れられる喜び

戦国時代の山城にとって、建造物はさほど重要ではなく、土木技術がものをいう。

山に刻まれた城の遺構が、どう守り、どう戦うか、戦略をそのまま伝えてくれる。

② 近世の城とは異なり個性がある

統一化、規格化されていない縄張（設計）。個々が知恵と技術をめぐらせた結晶から、先人の息遣いが感じられる。

○ 戦国の城の魅力

① 「縄張」を読み解く楽しみ

● 山中城（静岡県三島市）

… 小田原城を本城とする北条氏の支城。

北条氏が多用した「障子堀」がよく残る。東海道を挟み込んだ縄張も秀逸。

天正18年（1590）の秀吉の小田原攻めの際、北条氏が大改修。東海道を挟み込むようなV字の設計。

● 玄蕃尾城（滋賀県長浜市・福井県敦賀市）

… 天正10年（1582）、賤ヶ岳合戦の本陣として柴田勝家により築かれた陣城。

南北に主要な曲輪を4つ並べて土橋で連結。主郭の前方と後方に馬出しを配置した秀逸な縄張。

主郭北東隅には物見櫓のような建造物があった。織豊系の城の代表例。

→ 築城者・勢力・地域により、同時期であっても、設計や工夫に違いがある

② 「立地」に着目する楽しみ

● 鎌刃城（滋賀県米原市）

… 江南・江北の境目の城。

応仁・文明の乱（1467～77）の頃には堀氏の本拠になっていたと考えられ、戦国時代には浅井氏に臣従。その後織田氏に降伏し、天正2年（1574）に追放。織田氏直轄領となった。

→ 城が築かれる場所にも、本質を知るヒントがある

③ 「連携」を考える楽しみ

● 玄蕃尾城と賤ヶ岳砦群

… 陣城の構築合戦。柴田勝家・羽柴秀吉ともに数多くの陣城を築き、その数は合計で20以上にも及ぶ。

→ 陣城の配置や縄張の違いから、双方の「戦略」が見える

● 鳥取城・太閤ヶ平（鳥取県鳥取市）

… 天正9年（1581）の鳥取城攻めの際に構築された、秀吉の本陣。

鳥取城から、直線距離にしてわずか1.3kmほどの至近距離で対峙。

一時的な場所とは思えない立派な構造と執拗な防衛力。太閤ヶ平と鳥取城の間に設けられた強靱な大防衛ライン。

● 勝尾城筑紫氏遺跡（佐賀県鳥栖市）

… 組織的なネットワークのあり方が明確。

山上と山麓の居館、さらに支城群と城下町がよく残る戦国時代の城館。本城と支城との関係が一目瞭然に存在する。

→ 視点を引いて俯瞰で見ることで、戦術や構想、人や時間の動き、情勢や戦況の変化を辿れる

④ 「変遷」に注目する楽しみ

● 鳥取城（鳥取県鳥取市）… 天正9年（1581）の鳥取城攻め（第2次因幡攻め）で知られる。

* 信長の命を受けた秀吉率いる3万余の大軍が、吉川経家と城兵ら計4,000が籠る鳥取城を包囲。

城内への供給を絶ち、飢餓状態に追い込む兵糧攻めで開城させた。

- ① 兵糧攻めの舞台になった鳥取城は久松山の山頂にあった土づくりの山城。
(始まりは、因幡守護の山名氏か但馬守護の山名氏（山名祐豊）の築城)
- ② 山上にある石垣は、開城後に入った宮部継潤と、その後に入った池田長吉によるもの。
- ③ 山麓の石垣は、関ヶ原合戦後に池田長吉が山上から城の中心を移し、新たに構築したもの。

→ 必要性に応じて変化する。築城者・築城年にとらわれず、ひとつの城のなかに息づく歴史を見る

本日はありがとうございました。

□ 萩原さちこ（はぎわら・さちこ） / 城郭ライター、編集者。公益財団法人日本城郭協会理事・学術委員会学術委員。小学2年生のとき城に魅せられる。執筆業を中心に、メディア・イベント出演、講演、講座など行う。著書に『わくわく城めぐり』（山と溪谷社）、『お城へ行こう！』（岩波ジュニア新書）、『日本100名城めぐりの旅』（学研プラス）、『図説・戦う城の科学』（サイエンス・アイ新書）、『江戸城の全貌』（さくら舎）、『城の科学～個性豊かな天守の「超」技術』（講談社ブルーバックス）『地形と立地から読み解く「戦国の城」』（マイナビ出版）、『続日本100名城めぐりの旅』（学研プラス）など。web、新聞などの連載、共著多数。http://46meg.com/